

古代ギリシアのコスモロジー

—— 西洋思想史講義ノートより ——

山 川 偉 也

「古代ギリシアのコスモロジー」が、本日と来週の2回にわたる講義の論題です。

「コスモロジー」(cosmology)とは何のことでありましょうか。「コスモロジー」という言葉は、「コスモス」(κόσμος cosmos)と「ロゴス」(λόγος logos)という二つのギリシア語名詞が合成されてできています。「コスモス」と「ロゴス」、これらはいずれもたいへんに由緒の古い言葉であります。「コスモロジー」という言葉に関連させてプラトン以前のギリシアのコスモロジーに言及し、次いでプラトンの『ティマイオス』篇に焦点を絞った話をすることにしましょう。

I

1. 「コスモス」という語

「コスモス」(κόσμος)という語ならびにその派生語は、拙著『古代ギリシアの思想』(講談社学術文庫24ページ以下)において説明しておきましたように、きわめて射程が広くてその意味するところも多面的であります。これは元々、「適切・効果的かつきちんとした(事物・物事の)諸部分の配列・配置・構成・装置・構造」等を意味し、そこから転じて、「立派な飾り」「装飾」「装身具」「化粧」「化粧品」、さらにはまた、「整然と群れをなしたり集合したりしているもの」、たとえば羊群や軍隊が、「訓練や指揮にしたがって手

際よく・きちんと・見事に整列・順序・秩序づけられてあること」ここからさらに、道徳的・社会的な意味で、「よい振る舞いや法にかなった行為」などに関連するさまざまな意味をもつに至りました。

つまり「コスモス」およびその同類語は、もともと、軍事的・市民生活上の、政治的・美的・建築学的・道徳的諸領域でのさまざまな文脈において用いることのできる言葉でありました。しかしそれらの語義は、かならずしもただちに、ギリシアの最初期の哲学者たちが用いた意味、すなわち「宇宙秩序」や「世界秩序」といった意味をもつわけではなかったのです。

ところが紀元前5世紀以降、イオニアのミレトス学派やその系統に繋がる思想家たちに直接的・間接的に関連づけられうる数多くの文書のなかに、「宇宙秩序」とか「世界秩序」と訳さないと意味の通じない「コスモス」ならびにその同類語の使用例が続々と出てまいります。そしてその傾向はヘラクレイトスやパルメニデス、アポロニアのディオゲネス、ピュタゴラス学派のフィロラオス、エムペドクレス、レウキッポス、デモクリトスといった人々の言葉のなかにも目撃されるものでして、「宇宙秩序」や「世界秩序」、ひいてはまた「宇宙」そのものを表すものとしての「コスモス」概念がみいだされることになっていくのであります。そして彼らのいう「コスモス」概念は、結局、わたしの概括によれば、「自然学的探究の対象としてのすべての存在者からなる秩序構成、その諸部分がそこにおいて固有の位置価をもって構造化された有機的全体であって、その秩序構成は、それに内包される対立的・周期的・対称的な一連の諸原理の葛藤や相互転化によって生みだされるところのもの」、というふうに定義されるべきものであったのです。

2. 「ロゴス」という語

さて、「ロゴス」(λόγος)という語のほうですが、これは「レゲイン」(λέγειν)という動詞に由来します。「レゲイン」には基本的に二つの意味があります。一つは「選ぶ」「より分ける」のそれであり、他は「数える」のそれであります。第一のものからは「言明」「文」「命題」「説明」「主張」「表現」

等々の意味が出てき、第二のものからは「算定」とか「測定」とかの意味が出てくることになりました。「ロゴス」のこれら二つの基本的な意味のうち、重要なのは第一のもので、とりわけ「説明」としてのそれが、ギリシア哲学者の場合には最も重要なものとなっていきました。そして、「説明」としての「ロゴス」は、とりわけ、空想やイマジネーションを交えた「物語」風の「説明」としての「ミュトス」(μῦθος 神話)との対比においては、「合理的な討論にゆだねられ検討対象とされるものについて説明する言葉」という意味合いをもつこととなっていきましたが、この意味こそは、わたしたちの論題である「コスモロジー」という合成語に結晶しているものであるとすることができます。すなわち「コスモロジー」とは、字義どおりには、「コスモスについての合理的な説明」という意味をもつ言葉なのであります。

3. 「コスモ・テオ・ロジー」

しかしながら、哲学の始源に遡ってギリシア的コスモロジー生成の現場に身を置き、事柄を精神史的に回顧してみますと、指摘しておかなければならないいまひとつ重要な別の要因が「コスモロジー」という一語のうちには秘められているように思われます。そして、その事態を適切に表現するには、「コスモロジー」という言葉をさらに分節して、「コスモ・テオ・ロジー」(cosmo·theo·logy)とするのが最も適切な処置であるように思われます。すなわち「コスモス」と「ロゴス」の間に「テオス」(θεός 神)という語を挿入し「コスモ・テオ・ロジー」としななければならないように思われます。

かつてM・ハイデッガーは、ヨーロッパ形而上学の本質は「Onto - theo - logie」であると申しました。すなわちハイデッガーは、ヨーロッパ形而上学の本質をそれが「存在・神・論」であるということに見いだしたのです。ヨーロッパの形而上学は、その長い伝統において、密接に関連しあう三つの問題、すなわち「神」「世界」「靈魂」をめぐる展開してまいりました。「世界」をめぐるヨーロッパの形而上学的思索は、「神」や「靈魂」をめぐる問題圏域のなかで展開されたのです。すなわちその「コスモロジー」の実質は「コスモ・

テオ・ロジー」にほかなりませんでした。

いま述べたことは、たんなる妄言や戯れ言ではありません。ギリシアのコスモロジーは、それが始まった当初からして、すでに「コスモ・テオ・ロジー」でありました。その証拠をひとつお目にかけましょう。万物流転の哲学者エフェソスのヘラクレイトスの断片に、

「わたしに聞くのではなく、ロゴスに耳を傾けて、万物が一であることに同意するのが賢明というもの」(断片 50)

というのがあります。この断片にすでに、ギリシア人の「ロゴス」の二重性が、まぎれもなくはっきりと現れております。すなわちその二重性とは、ヘラクレイトスという個人が口にするロゴス（合理的説明）とその説明がそれに基づいてなされるところのコスモスそのものに内在する客観的で神的な法則としてのロゴスとの二重性であります。

別の断片においてヘラクレイトスはまた次のようにも言っております。

「すべてにわたって同じであるこのコスモスは、神にしてもひとにしても、これを造ったのではない。それは、かつてあったし、あるし、あるであろう、尺度にしたがって燃え、尺度にしたがって消える、永遠に生きる火である」(断片 30)

と。ヘラクレイトスにとってロゴスとは、なによりもまず、「尺度にしたがって燃え、尺度にしたがって消える、永遠に生きる火」としての神の言葉であり、また、その表現としてのコスモスに内在する「尺度」であり「法則」でありました。そしてその神の法則つまりコスモスに内在する神のロゴスは、彼の場合、あらゆる雑多な対立物をみずからのうちに集約しているところの一者でありました。

「神」という語を挙げて神性を規定しようとする唯一のヘラクレイトスの

断片に、次のような謎めいたものがあります。

「神は、昼夜・冬夏・戦争平和・飽食飢餓。香が炊かれ、めいめいのひとが好きなようにお題目を唱えるときみたいに、それは違ったものとなる。」

この断片が言おうとしているのは、神（＝永遠に生きる火）が一切の対立を超えたものであるということであります。「昼」を、「夏」を、「平和」を、「飽食」を といたしましょう。そのとき神は、

= () () () ()

と表現することができるでしょう。この一なる神を、断片 30 にいう一なるコスモスと区別すべきなんらの徴もヘラクレイトスの他の発言にみいだすことはできません。ヘラクレイトスにとってコスモスとは、互いに否定関係にある二極の力動的統一体としての神にほかならなかったのです。

こうしてコスモスについて思索するとは、ヘラクレイトスにとって、「コスモ・テオ・ロジー」の展開にほかならなかったのです。

4. 世界秩序

いまヘラクレイトスについて述べましたことは、多かれ少なかれ、他の初期ギリシア哲学者たちについても当てはまることでありました。タレスをはじめとする初期ギリシア哲学者たちは、そもそものはじめから、ヘシオドスの宇宙創世神話にみられるような「どこから、どのようにして」現在みられるような世界の秩序が成ったかという問いによって主導されました。そしてその際、彼らは、

(1) 万物の「アルケー」、つまりものごとの出発点、神話にいう「はじめに」を立て、

- (2) このアルケーからの世界秩序の漸次的「生成」と「発展」を説き、
- (3) このアルケーをコスミックな「神」の観念に結びつけ、
- (4) 「永遠」「不生」「不滅」「不老」「不死」「無限」などの形容句を冠し、
- (5) 「万物を包括し操縦する」神の力の普遍性を「正義」等の語によって強調しました。

彼らにとって、宇宙についての合理的な説明としてのコスモロジーは、そのラショナルなあり方そのものをも含めて、同時に、神学的でありました。すなわち、ラショナルな存在への彼らの信念は、神的存在への彼らの信念と分かちがたく結びついていたのです。

そのことについては、いちばん最初の哲学者タレスがすでに、彼の立てたアルケー「水」に冠して「神的」という形容句を冠したという伝承に現れ、彼の弟子アナクシメネスが「無限な空気がアルケーである」と語ったときに、そのアルケーとしての「空気」について、「空気が神である」としたことからも明らかであります。イオニア科学の伝統のなかにあつて漂泊の吟遊詩人クセノファネスが、アリストテレスの報告によれば、「全天を見つめて『一なるもの(ト・ヘン)』が神である」と語り、あるいは「コスモス」そのものを、「一なる神、神々と人間どものうち最大なる者、姿においても思惟においても、死すべき者に似ても似つかぬ」(断片 23) と語ったのも、同じ精神的土壌においてのことでありました。一定の神学理論に基づいて「魂の浄化」を課題として音楽と数の研究に向かったピュタゴラス学派のコスモロジーが、これまたその本質において「コスモ・テオ・ロジー」であったことも、言うまでもないことでもあります。

5 . 神的コスモス

コスモスを神的なものともみなすこうした伝統は、はるか昔のタレスの時代から連綿としてローマの、たとえば紀元後 1 世紀の自然誌家プリニウスにいたるまで一貫して伝えられました。プリニウスはこう言っています。

古代ギリシアのコスモロジー

「世界は聖なるもの、永遠なるもの、測りがたいもの。全体の全体、一にして全なるものそれ自体。無限、しかも有限なものに似、すべてのうちで最も確かであるとともに確かならぬものに似たもの。みずからのうちに、外に顕れてある一切と内に秘められた一切を包蔵するもの。事物の本性の所産であると同時に事物の本性そのものたるもの。」(mundus sacer est, aeternus, immensus; totus in toto, immo vero ipse totum; infinitus et finito similis; omnium rerum certus et similis incerto; extra, intra, cuncta complexus in se; idemque rerum naturae opus et rerum ipsa natura.)

「コスモス」(cosmos)、「ムンドウス」(mundus) についてのこのような見方は、「世と世にある欲は過ぎ去る」(「ヨハネの第一の手紙」第二章)とみなしたキリスト教的な伝統が西欧の主流をなした時代にも強固に生き残りました。「世と世にあるものごとを愛してはいけない」(「ヨハネの第一の手紙」第二章)という言葉にもかかわらず、被造物のうちの最大なるもの、最美なるものとして、コスモスは神的啓示の最高の顕れでありつづけました。そして西欧のコスモロジーは、一貫して、「コスモ・テオ・ロジー」でありつづけたのです。

ここで改めて申し述べなければならないのは、西欧のコスモロジーがギリシアにおける「コスモ・テオ・ロジー」の正嫡の子だということにあります。そのことは、ニュートンやアインシュタインといった物理学の歴史に巨大な足跡を印した偉人たちについてすら言いうることであるように思われます。ニュートンはかつて、みずからを、浜辺で貝殻を拾って遊ぶ無邪気な幼児に喩えました。「自然」を探求する者は、ニュートンによれば、広大な海の渚を逍遙しつつ、わずかに貝殻のような真理の薄片を手に入れることができるだけなのです。しかし、浜辺に打ち上げられた貝殻の断片の背景には、底しれぬ巨大な真理の海原があるというのです。

ところで、「真理の海原」へのニュートンの言及には、ラショナルなものと

しての宇宙の秩序に対するニュートン自身の信仰告白のようなものが窺われるように思われます。同様に、晩年のアインシュタインが、量子力学に疑義を抱き、ボルンに宛てた有名な手紙 (Einstein and Born 1969) のなかで「あなたは神様がサイコロ遊びをされると信じておられる。けれども、私は、客観的な世界に存在する完全な法則と秩序を信じています。私はそれを、本能的な直観によって、なんとか捉えようとしているのです。私はこのことを断固として信じます」と述べたとき、その信念は、イリヤ・プリゴジンに言わせれば、スピノザ的な神の存在への信念、つまり「自然と同一視される神」「至高の合理性としての神」への信念に匹敵するものであったのです。

II

さて、これまで、ソクラテス以前のギリシア人のコスモロジーを取り上げ、その意義を「コスモ・テオ・ロジー」ということに絞って見てきたわけですが、そのことを踏まえたうえで、話題をプラトンのコスモロジーのほうに移してみたいと思います。話の都合上、まず最初にエルヴィン・シュレーディンガーの言葉を引き合いに出してみようと思います。

1. シュレーディンガーの言葉

シュレーディンガー (Erwin Schrödinger 1887-1961) といえば、その波動方程式 (1926) によってよく知られ、わが国では『生命とは何か』(*What is Life? The Physical Aspects of the Living Cell*, 1944. 岩波新書, 岡小天, 鎮目恭夫訳) という著書によって親しまれている物理学者であります。晩年に彼は、統一場理論における「真の前進」をめざして自信をもって提出した『アフィン場の最終規則』(1947年) が受け入れられず (アインシュタインの反論による) 健康面でも眼に障害が出たりして、科学的世界像の基礎に関する哲学的問題に沈潜するようになりました。『科学的世界像の特性』(*Die Besonderheit des Welt-bildes der Naturwissenschaft*) とか『自然とギリシ

ア人』(*Nature and the Greeks*, 1954. 河辺六男訳『自然とギリシア人 原子論をめぐる古代と現代の対話』工作舎、1991年)が、その沈潜の結果として生まれました。

シュレーディングガーは、『自然と人間』の最終章「科学的世界像の特性」の結論部分において、ギリシア的世界像つまりは科学的世界像のもつ特性として、(1)「自然現象は合理的に理解可能である」とする基本的仮定、および、(2)この世界像の構成の基本的前提として、認識主観をしめだし、これを「外部観測者」の役割に後退させる「客観化」(Objektivierung)あるいは「外界実在の仮説」(Hypothese der realen Aussenwelt)があると述べています。

これら二つの仮定は、シュレーディングガーによれば、互いに密接不可分な仕方に関連しあっています。第一の仮定は「自然が示し顕すところのものは(合理的な仕方で)理解されうる」というものでありますが、これは、シュレーディングガーによれば、「非降神術的・非迷信的・非魔術的な見地」の表明であり、第二の仮定は、「理解する者(われ)」(主体)を「理解される物(それ)」の世界の外に置き、締め出してしまうものでありますが、そのようにしてはじめて、シュレーディングガーによれば、第一の仮定における「自然」理解の「合理性」が得られるものであったのです。

このことについてシュレーディングガーは、いっそう詳しくは次のように言っております。

「科学者は、自然を記述し理解しようとするなかで無意識的に、ほとんど気づくことなく、描かれるべき像から自分自身を、自己の人格を、知覚主体を、無視または削除することによって...外部観測者の役割に一步後退しているのです。これは仕事を非常にやりやすくします。しかしその描像に空白やおびただしい欠落を残し、ことの始めに放棄してしまったことを忘れて、自分自身をこの描像の中に見いだそうとしたり、自分の感じ考える精神をこの描像の中に取り戻そうとすると、パラドックスや二律背反に導かれるのです。」

科学的世界像は、とシュレーディンガーは言います、「本当に私たちの心情に近いところ、本当に私たちにとって重大なところ、どれもこれもすべてについて、おそろしく無口」であります。それは何も不思議なことでは決してなく、それはそもそもの始めから、科学が「外界の描像を構成しようとの目的から、自分自身（人間自身）を切り捨て除き去るという方策」を取ったからにほかなりません。そしてこれこそ科学的世界観が、「倫理的価値も、審美的価値も、われわれ自身の究極の視野または目的については一言も、さらにお望みなら神さえも、含まなくなってしまった理由である」。

こうしてシュレーディンガーは結論します、「われ、いずこより来たり、いずこへと去りゆくか？」といった問いは、科学が成立するその発端において、すでに、取り除かれてしまっていたものなのである。科学は、ふつう無神論的であると銘打たれているが、なんら驚くに値しない。科学は、それが科学である以上、神について語ることをしないのである、と。

2. プラトンの『ティマイオス』篇について

いま紹介しましたシュレーディンガーの言葉は、わたしには、さまざまな疑念を喚び起こすものと映ります。科学的世界像の来歴を、彼は、ギリシアの哲学者たちの思想に直接に接続させていますが、彼らの思想のシュレーディンガーによる取り扱い、わたしには、文献学的に根拠薄弱であり、その解釈も一面的であるように思われます。しかし、それにもかかわらず、彼が近代以降の科学的世界観に妥当するものとして引き出したところの、上に述べた結論は、おおまかには、妥当なもののようにみえます。近代の科学的世界像（*prima facie*）はガリレオやデカルト以来、ますます、「神」の消去の方向へと一途に進んでいったように思われます。そしてその方向は、ニュートン力学に依拠して決定論的宇宙論を展開したラプラスが、その宇宙に占める「神」の位置をナポレオンに問われて、「陛下、わたくしには、そのような仮説の必要はございません」と答えたときに、ひとつの決定的なかたちをとったように思われます。

古代ギリシアのコスモロジー

現代科学の大勢もまた、この趨勢をうけついで、おおむね、「主観」排除的かつ「無神論」的であるように思われます。そして、「科学」というものをこういう眼、つまりシュレーディングー流の仕方で見るとするならば、今日の主題であるプラトンの『ティマイオス』篇で展開されているコスモロジーほど「非科学」的なものはないということにもなるでしょう。というのも、この対話篇においてプラトンが意図したのは、「主観」ぐるみの、そしてなによりも「神」ぐるみのコスモロジー、つまりは正真正銘の「コスモ・テオ・ロジー」であったからです。

シュレーディングー流の考え方をする人からすれば、プラトンが『ティマイオス』篇で展開している言説は、およそ「科学」とは最も縁遠い、「奇妙」な、あるいはもっと露骨に言えば、「グロテスク」な代物であったと言わなければなりません。そして実際、『自然とギリシア人』という書物のなかでシュレーディングーがまともに論究することのなかった唯一のギリシア哲学者とは、プラトンにほかならなかったのです。つまりシュレーディングーには、プラトンが、ギリシアの「科学的」伝統のなかにきちんと位置づけられるべき人物であるとは到底思えなかったようなのです。が、しかし、そのような理解がはたして、西洋の歴史を通じて正統的なものであったかどうかについては、少々、疑ってみてもいいのではないかと思います。というのも、『ティマイオス』篇が「グロテスク」な印象を西洋の人々に与えるようになったのは、せいぜい、「科学」(science)とか「科学者」(scientist)といった概念が「哲学」(philosophy)とか「哲学者」(philosopher)といった言葉よりも、なにか尊重に値するものと人々に意識されるようになって以降のことではないか、と思われるからです。

ところでニュートンはといいますと、まだ自分のことを、「自然」について思索をめぐらすひとりの「哲学者」だと考えていたのです(ニュートン『自然哲学原理』1687年)。実際、プラトンの『ティマイオス』篇は、西欧の知識人たちがアラビアを経由して入ってきたギリシア人の遺産のうちプラトンについて知った最初の記念碑的な対話篇でした。そしてこの対話篇は長いあい

だ、西洋中世を通じてプラトンの「主著」とされ、特権的な地位を占めつづけたのでした。みなさんもよくご存じのラファエロ作のフレスコ画『アテネの学堂』（ヴァチカンの間、1512年）の中心をなす二人の哲学者プラトンとアリストテレスのうち、プラトンが手にしている書物を子細に眺めてみますと、その背文字には、「ティマイオス」という文字が読み取れます。ラファエロはプラトンを、なによりも、『ティマイオス』篇の著者だと考えていたのです。ということはまた、当時の人々もまた、そう考えていたということです。中世の人々にとってプラトンは、なによりも、自分たちの「理性的創造主である神が天地万物と人間を合目的な仕方でも創造した」とするキリスト教的信念に哲学的根拠を与えてくれる『ティマイオス』篇の著者であると考えられていたのです。

中世のコスモロジーは、その本質において「コスモ・テオ・ロジー」でありました。そういう観点から『ティマイオス』篇はさかんに注釈され・解釈されてきたのです。そしてその伝統は、なにも中世に始まったというわけではなく、すでにアレクサンドリアのフィロンにおいて開始されていたと見ることができます。フィロンは、キリスト教が生まれる以前に、ユダヤ教の伝統のなかで、プラトンの『ティマイオス』篇を、旧約における「創造」の觀念に合致するかたちで解釈しようとしたのでした。しかもその伝統は、シャルトル学派による12世紀の人文主義復興の時代からルネッサンスを通じてケプラーやニュートンにまで影響を及ぼしつづけたのでした。その影響は、それ以降にあっても、ウィリアム・ブレイクといった詩人や現代のホワイトヘッドやハイゼンベルクにいたるまで、さまざまな仕方での強力な影響を及ぼし続けたのでした。

3. プラトン『ティマイオス』篇の意義

『ティマイオス』篇へのこのような多様な関心は、どこから来たのでありましようか。それは、『ティマイオス』篇という対話篇が、文字通り「一切」（*nāv*）を包括しようとするものであったからであります。「主観」を排除し

「非降神術的・非迷信的・非魔術的」であるどころか、そこには、わたしたち、いわゆる「合理的思考」にすっかり染まってしまっている現代人の眼からしますと、とにかく怪しげな、ソクラテスの時代から数えてでも9000年前に栄えたという「アトランティス大陸」についての報告のような、SFないしはオカルトめいた話の類までが、つめこまれているのです。そして、プラトンの「コスモロジー」は、そうした、わたしたちの眼からすると、およそ「科学」的議論というにはほど遠い、さまざまな議論のパッチ・ワーク（と見られるもの）の文脈のなかにはめ込まれています。

『ティマイオス』篇は、その構成において、意図において、いうところの「科学」論文にはほど遠いものなのです。これをなにかに譬えようとするなら、私は、密教（Esoteric Buddhism）の「曼陀羅」図といったものになぞらえるでしょう。「コスモロジー」といえば、ふつう、天動説とか地動説といったものが言及され、天体の軌道についてどういう説明が成り立つかといったことが主として話題にされますが、『ティマイオス』篇のなかでは、なるほどそれらについてもかなりな比重が与えられてはいるものの、要するに全体の議論のなかの一部であるにすぎないのです。少なくとも、それらの話題は、密教の「曼陀羅」図に関連させて申しますと、大日如来が座す中心の位置は与えられておりません。

4. 『ティマイオス』篇の主題

では、いったい、『ティマイオス』篇の中心をなす話題は何なのでしょう。その主題は、表向き、明らかに「自然的世界」(フュシス)です。そのことに間違いはありません。しかし、そのいうところの「自然」は「自然科学」との類比においてわたしたちが漠然と了解しているそれでは決してありません。というのも『ティマイオス』篇でいう「自然」は、この対話篇の冒頭部分が告げているように、人間の本性や、また政治的動物としての人間がくりひろげる全活動をも包含するものであるからです。

すなわちこの対話篇の冒頭は、ソクラテスが「昨日の話」を思い出しなが

ら三人の話相手にその要約をしてみせるところから始まっているのですが、その話は、①生産者階級と戦士階級の区別、②自然本性に即した専門職、③守護者階級の魂について、④体育と文芸による戦士の教育カリキュラム、⑤私有財産の禁止と共同生活、⑥男女無差別の仕事について、⑦子供の共有、⑧優生学的配慮と抽選結婚、⑨育児の際の選抜と交換といったものであり、これは明らかに『国家』篇の第二巻から第五巻までの内容に相当する筋書きで、そのことから分かるように、プラトンは『ティマイオス』篇のコスモロジーを、『国家』篇における理想国家論を包含するものとして展開しようとしているのです。そして、問題の『国家』篇はというと、ひとつの目的論的政治思想の展開であり、そこでは「善のイデア」といったものが、議論の中核をなすものとして提出されていたのです。

『ティマイオス』篇は、少なくとも表向きには、『国家』篇の課題を引き継ぎ、これをいっそう大規模な仕方で、人間本性にかかわる一切を宇宙的規模から体系的に説明しようとするものである、と言わなければなりません。だとしますと、わたしたちは、その所謂「コスモロジー」を、わたしたちが慣れ親しんでいる近代的思考の枠組みをもってしては、原理的に、捉えることができないということにもなります。

わたしが言おうとしているのは、次のようなことです。アリストテレスが説いたものとしてよく知られている所謂「四原因説」のことを想起してみましょう。アリストテレスは『自然学』第二巻第三章において、およそ何であれ生じたものについては、必ず四つの原因によって規定され、それら四つの原因にその生成を帰することができるかと述べたのです。「原因」と訳したアリストテレスの言葉「アイティア」は元々法廷用語で、「責め」「責任」を意味する言葉です。その「責め」「責任」という言葉を、アリストテレスは、ものの生成の原因という概念に鍛え直し、生成物についての「形相因」「質料因」「動機因」「目的因」を区別したのでした。

例えば、一個のヘルメス像をとってみますと、その材料の青銅は「質料因」であり、その形は「形相因」であり、それを造った彫刻家は「動機因」であ

り、それがそのためであるところの祭礼は「目的因」だということになります。アリストテレス、そしてプラトンの思考は、これら四つの「原因」という概念枠組みによって規定されていました。ところが近代の思考の顕著な特色は、これら四つの原因のうち「目的因」と「動機因」を排除するところにあります。なるほど生物学にあっては「目的因」がなお生きておりますが、その「目的因」が「動機因」としての「神」の概念に結びつけられるや否や、心ある科学者たる者は顔をそむけるものだ、ということになっております。比較的最近のところでは、具体的に、ティヤール・ド・シャルダンの壮大な進化学説が、そういった、顔をそむけてしかるべきものの一つの典型だとされております。

つまり、『ティマイオス』篇には、アリストテレスが四原因として数えたすべてのものが顔をそろえて出現し、しかもそのコスモロジーの原理的な位置を占めているわけです。近代のコスモロジーが取った所謂正統路線からすれば、これは、理解不可能で、古色蒼然たる「化石」に類するものだという事にもなるでしょう。

5. 四つの原理

いま述べた四原因説に対応させて、『ティマイオス』篇が立てる四つの原理を述べてみましょう。この対話篇では、自然的世界の生成を説明すべく、それら四つの原理が次のような仕方で提示されています。

- | | |
|---------------------------|-----|
| ・ アイデア（あるいは自然的世界のパラダイム） | 形相因 |
| ・ コーラ（あるいは自然的世界の材料） | 質料因 |
| ・ デミウルゴス（あるいは自然的世界を形成する者） | 動機因 |
| ・ 善（あるいはデミウルゴスが目的とするもの） | 目的因 |

自然的世界つまりコスモスは、これら四つの原理が交わるところに、プラトンの言うところによれば、善を志向する「神の配慮により魂と理性を備え

た生き物」として生まれた、とされています。しかしその創造ないし形成は、なんらの素材なしにはありませんでした。その創造ないし形成は、「調子はずれに無秩序に動いている」素材を元にして、これを「無秩序な状態から秩序へと導き入れる」ことによって行なわれたのです。プラトン『ティマイオス』篇に登場する神デミウルゴスは、よかれあしかれ、キリスト教の神のように「無からの創造」(creatio ex nihilo)を行なう全智全能の神ではありません。

「全知全能」という概念には、「サイバネティクス」の創始者ノバート・ウィナーが意地悪い仕方で指摘しましたように、集合論におけるラッセルのパラドクスに酷似するパラドクスがつきまといますが、いずれにしてもプラトンの神は、そういう意味では全能ではなく、その創造の行為は、あらかじめ存在する二つの原理、すなわち(1)永遠の生き物としてのイデア界をモデルとし、(2)それを投射する場面としてのコーラ(場)を予定するものでした。つまり、自然的世界としてのこの宇宙は、善なるものとしての神デミウルゴスがコーラを素材として、あるいはむしろこれを「場」として造りあげたイデア界の模造品だったということです。

6. イデア：写像 = 存在：生成 = 合理的なもの：準合理的(蓋然的)なもの

ここで注目していただきたいのは、プラトンによって、イデア界とその模造品としての宇宙の関係が、「存在」と「生成」のそれに等しいものとして捉えられている点です。プラトンは、パルメニデスの思想を継承し、本当の「知識」といえるものはただ「存在」するものについてのみ成り立ち、生成するものについてはたんに「思惑」しか成り立たないと考えていました。したがってまた、イデアとその模造品との関係はまた、「知識」(エピステーメー)と「思惑」(ドクサ)の関係に等しいものでもあるのです。知識は確実ですが、思惑は蓋然的でしかありません。そして、プラトンの考えによると、自然的世界としての宇宙は、ヘラクレイトスが考えたように永遠に存在するものではなく、明らかに生成したものなのです。この点に関する彼の推論はそれな

りに強力です。それによれば、この宇宙に存在するところの、わたしたちが観察しうる個々のものはすべて、生成し消滅します。だとすれば、それら生成し消滅するすべてのものの総体としての宇宙そのものもまた、生成したものだとしなければならない。そして、生成したものだとなれば、その生成の原因となるものがあつたはずだ、というのであります。

この点を、いまいし立ち入って考えてみましょう。プラトンがコスモスの生成について思いをめぐらせたそもそもの当初に立てたところの問いは、思うに、ライプニッツが充足理由律を立てるに際して問うた問い、すなわち

「なにゆえに無よりもむしろ何らかの事物が存在するのであるか？」

という問いと、そうかけ離れたものではなかつたであろうと思われまふ。なにか存在事物があるということ、なにか或るものがあつてむしろ無ではないということ、そして、宇宙があつて、そのなかにわたしたちが存在しているということ、よくよく考えてみれば、このことにもまして謎めいたことがいったい他にあつてでしょうか。

この謎というのは、たしかに形而上学的なそれではありますが、プラトンは、たしかに、人間をめぐり一切のものの巨大な住居としての宇宙の存在に目をとめ、その存在の理由を問うたのです。そのとき、問いに先立って与えられていたのは、あくまで、所与の事実としての宇宙の存在であつたのです。

四つの原理としてわたしが述べたものは、この所与の事実としての宇宙の存在の背後にあつて、これを、人間の知性によって理解可能にするものとして、透かし見られたものにほかなりません。このとき宇宙は、「コスモス」という言葉が示すとおり、人間の知性にアピールしうる「合理的」な「秩序の体系」としての相貌を顕したのです。換言すれば、宇宙はそのとき、「合理的なもの」としての實在がそれを通じて自己を表現するところの媒体として見られたのです。

この事情に加えて、感覚が捉えるすべては、つねに「生成」しており、一

時も本当の意味では「存在」してはいないとするプラトンの確信を考慮に入れますと、彼が、すでに述べた四つの原理に言及したのは、決して偶然ではなく、かえって必然のことであったということが分かります。

7. アイデア、コーラ、生成

こうしてプラトンにとって、合理的に理解可能なものとしての自然的世界秩序のありようは、必然的に、その背後にあってそれを支える「存在」の秩序、つまりは自然的世界秩序の存在を通じて自己を表現する真の實在、アイデア的存在、を示唆するものであったのです。そしてアイデアは、それを受容するところの「コーラ」なしには、また、アイデアを「コーラ」のうえに映し出す働きを最善を尽くして実現する神としてのデミウルゴスなしには、その「パラダイグマ」(範型)としての働きをなしえないのであります。

このような短い時間のうちに、プラトンのコスモロジーの細目にまで立ち入った話をすることはできません。ここでは、以上に述べてきたこととの関連において、プラトンが「生成するものと生成するものがそれの中で生成するところの当のもの、ならびに生成するものがそれに似せられて生ずるその元のもの」(50d)と呼ぶ三者の関わりにおいて、みなさんの興味を引き『テイマイオス』篇を読んでみたい気持ちを起こさせるかもしれない若干のことに光を当ててみましょう。

いま引用しましたプラトンの言葉のうち、(1)「生成するもの」とは巨視的には目にみえるものとしての宇宙全体を指しますが、他方で、それはこの宇宙内に生ずる個々の事象の一切をも指しています。そして、(2)「生成するものがそれに似せられて生ずる元のもの」とは、巨視的にはアイデアの総体としてのアイデア界そのものを指しますが、そこに含まれている個々のアイデア、たとえば火のアイデアとか水のアイデアとかをも指します。そして最後に(3)「生成するものがそれの中で生成するところの当のもの」とは、すでに「コーラ」(場)として言及してきたものを指します。

これら三つの枠組みを用いてプラトンが説明しようとしているのは、彼に

先立つギリシアの自然哲学者たちが試みたところの一元的物質原理からの、あるいは多元的物質原理からの世界秩序の生成という事態です。アナクシマンドロスやアナクシメネスは一元的なアルケーすなわち、「無限なもの」や「気」からの世界秩序の生成を説いたのです。これに対し、アナクサゴラスやエンペドクレスやデモクリトスといった人々は、あるいは無限数の「種子」、あるいは「火・気・水・地」といった四元素、あるいは分割不可能な「原子」(アトム)と「空虚」(ケノン)といった多元的原理からの世界秩序の生成を説きました。プラトンがやろうとしたのも、これとちがったことではありませんでした。しかし、それをやろうとするときプラトンがもちだした道具立ては、彼らとはずいぶん違ったものでした。

アイデアについては、わたし自身がプラトンのアイデア論の研究者として出発したという事情もあって、これに言及するとなれば、かえって話はずいぶん難しくなり、込み入ったものともなるでしょう。だから、思い切ってアイデアについての話は端折ることにいたしましょう。アイデアというのは、乱暴な言い方ですが、要するに一種の理想的な設計図だと考えておいて下さい。それは、プラトンに言わせれば「ただ理性によってのみ把握され、完全にそれ自体として独立に存在し」(51d)、時空のなかに存在するものではありません。だから、もちろんそれは、わたしたちの頭のなかにあるものではありません。理想的な設計図といったゆえんです。

他方、「生成するもの」とは、この理想的な設計図としてのアイデアの模造品・写像であって、当然それは、自分以外のものであるアイデアの影像として、「なにか他者のなかに生じ、そのことによってどうにかこうにか『ある』にしがみつく」仕方では存在し、そうでなければ「それはまったくありもしない」(52c)のものであると言われています。みなさんは、影絵のようなもの、あるいはテレビの受像機に映っているアメリカ大統領の顔のようなものを思い浮かべてしかるべきでしょう。影絵やテレビの影像是、実物とそれが写し出されるスクリーンや画面がなければ存在することができません。

8. コーラ

問題はこの三者、つまり「あるもの」としてのアイデアと、その影像としての「生成」と、その影像がそこに写しだされる「場」のうちの最後のものにあります。

この「場」(コーラ)は、プラトンによってさまざまな名前で呼ばれています。アイデアを「父」、生成を「子」とすると、場は「母」に当たるといわれ、「生成の乳母」(ティテーネー)と呼ばれ、「子宮」と呼ばれ、「エクマゲイオン」(可塑的なもの)とも言われております。が、いずれにしてもこれは、宇宙生成以前にすでに存在し、やがて宇宙が生ずるときの土台を提供するものなのです。このものについてプラトンはこんなふう述べております。

「そこで生成の乳母は液化され火化され土や空気の形状を受け入れるとともに、他にもそれらに伴うすべての状態を身に受けて、見た眼にありとあらゆる外観を呈しましたが、なにぶん、似てもいなければ均衡もとれていない諸力によって満たされたために、そのどの部分も均衡がとれないで、自分自身がそれらによって不規則にあらゆる方向へと動揺させられて、ゆすぶられながら、また自分のほうも動かされ動くことによって、逆にかのものをゆすぶり返しました。...そんなふう四つの種類のものがその容器によってゆすぶられていたのですが、容器そのものは、ちょうど、振動を与える道具のように動いて、相互に最も似ていないものを互いに最も大きく引き離し、また最もよく似ているもの同士を最大限同じところに集まるように押しやりましたから、まさにそのことのために、宇宙がこれらのものから秩序づけられて生ぜしめられる前に、すでにこれらのものは、それぞれが違った場所を占めていたのです。実際、宇宙の生まれる前には、これらすべてのものは、まだ比率も尺度もない状態にあったのです。そして、万有の秩序づけが試みられた時、最初は、火、水、土、空気は、なるほどなにかそれ自身の、一種の痕跡を持つてはい

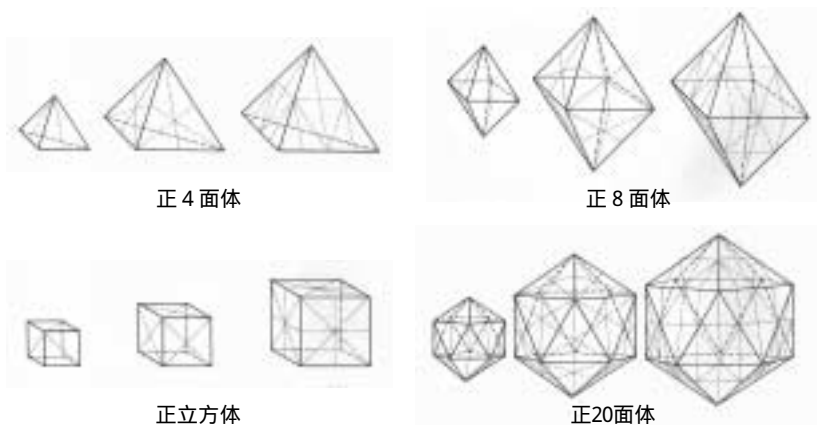
ましたが、しかし、まったくのところ、何物たりとも神が不在の場合にはさぞやかくありなむといった有り様だったので、...これを神がはじめて、形と数を用いてかたちづくったという次第なのです。」

分かりにくいかもしれませんが、が、プラトンが伝えようとしているのは、要するに、ソクラテス以前の自然学者たちが「アルケー」(根本物質)の探究において語ろうとしたものの彼流の記述であります。その記述は、おそらく、はるかな昔にアナクシマンドロスが「ト・アペイロン」によって言おうとした事柄にいちばん近いものでありましょう。アナクシマンドロスは、「ト・アペイロン」の漸次的分化の過程から後代の人々が四元素と呼んだもの、すなわち「火」「気」「水」「土」等々に相当する世界秩序の素材が分出されてくると考えたのでした。

ただし相違もまた目立ちます。アナクシマンドロスは、たぶん、「火」「気」「水」「土」等を、世界秩序の直接的な素材であると考えたでしょうが、プラトンはそれを否定しているからです。世界秩序の生成以前にあった物質原理は、彼によれば、「火」や「気」や「水」や「土」の痕跡にたくえられる不均衡な力に満たされた「場」以上のものではなかったからです。それは、今風にいうならば一種のエネルギー場のようなものです。それが宇宙生成にむかって秩序づけられるにいたるのは、そのなかで無秩序に揺れ動いている「火」や「気」や「水」や「土」の痕跡(というよりは原質料)が「形と数を用いて」限定されることによってなのであります。そして「形と数」は、プラトンによれば、「合理性」というものの本質的な徴表の担い手であったのです。

さらに、宇宙生成の素材、四元素としての「火」「気」「水」「土」は、プラトンによれば、決して究極的な要素、たとえばデモクリトスが構想したような「原子」といったものではありませんでした。それらは、「プラトンの正多面体」と呼ばれるようになった四つの多面体、すなわち正4面体(4つの面、6つの辺、4つの頂点)、正8面体(8つの面、12の辺、6つの頂点)、正立方体(6つの面、12の辺、8つの頂点)、正20面体(20の面、30の辺、12の頂

点)によってイメージされるところの粒子、同位元素のようにレベルや大きさを異にするさまざまな種類のものをそれぞれにもっているものと考えられました。が、それだけではなく、それらの粒子は、究極的には、面を構成する二種類の三角形に還元されうるものと考えられたのです。(詳しくはダウド・サットン『プラトンとアルキメデスの立体』ランダムハウス講談社を参照ください。)



9. 結び

プラトンの数学的コスモロジーは、現代的観点から、量子力学者ハイゼンベルクや有機体の哲学者ホワイトヘッドなどによって称賛されてきました。しかしこの論点については、いよいよもって時間が切迫してきましたので、端折らざるをえません。その代わりに、わたしはここで、本来の意味でのコスモロジーたるものは「人間」の本当のあり方と思えるものを含みこんだものであるべきだと強調することにいたしましょう。

考えてみますと、「人間」を排除したコスモスについての合理的説明としてのコスモロジーなどといったものは、奇怪しごくなものであります。同様に、「神」について語ることをなにかいがわしいことであるとする一方、「科学的法則」こそが真に頼るに足る唯一のものだと考えている人々もまた、ど

古代ギリシアのコスモロジー

こかしら偏頗な考えに囚われているのではないのでしょうか。ホーキングが、人間の自由意志に関連して「決定論」について述べるなかで、古典的ではありますが傾聴に値することをいっています。

「この決定性ということが、全能の神によるものであるか、科学法則によるものであるかは、どちらであれ大した違いはないといえます。実際、科学法則こそが神の意志の表れであるということもできるのですから」
(S・W・ホーキング(1991)『時間順序保護仮説』佐藤勝彦解説・監訳、NTT出版)